

平成 29 年度自治医科大学大学院看護学研究科 F D 活動のまとめ

I. 平成 29 年度 科目責任者による授業改善の取り組み

1. 博士前期課程

1) 共通科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
看護管理・政策論	春山 早苗	無記名による自作の授業評価票により評価した。項目は「必修科目であることの意義が理解できるか」「授業内容及び授業スケジュールへの意見・要望」「授業全般の感想」とした。評価結果に基づき、次年度の授業改善内容を検討した。
病態生理学特論	北田 志郎	昨年同様初回講義時に講義内容の要望を聴取すると共に、事前課題の振り分けを行った。その後も適宜授業内容について学生からの意見を聞き、以降の授業に反映させた。講義最終回には振り返りの機会を作り、次年度の授業改善に努めた。
フィジカルアセスメント特論	村上 礼子	学生の専攻分野を勘案して、非常勤講師と講義・演習の内容の洗練を依頼した。適宜、講義・演習内容や進め方、高度看護実践への応用性などについて、意見や要望を聴取した。出された意見などは非常勤講師にも共有し、次年度の授業改善に向けて検討した。昨年度からの変更で、今年度新たに、最終授業で模擬患者を用いた診察場面のシミュレーション演習を行ったため、演習の到達度、感想・意見・要望等を聴取し、次年度の授業改善に努めた。
臨床薬理学特論	大塚 公一郎	各回の授業終了後に担当教員から意見を聞くとともに、学生より授業に対する感想・意見・要望等を聴取し、次年度の授業改善に努めた。
看護実践研究論	半澤 節子	オムニバスで展開するため、最初の講義担当教員は学生の臨床経験や研究動機などを把握し一覧にして教員間で情報共有した。また、教員の配布資料や学生のレポートはファイリングし、担当教員間で共有した。科目責任者は、すべての講義終了前に授業に対する意見や要望を聴取し、次年度の授業改善に努めた。
コンサルテーション論	永井 優子	履修者数が3名のため、履修者間の調整が円滑にでき、学修が負担にならないように、また、科目等履修生の学修状況を確認して学修支援を含めて配慮しつつ、授業方法を検討した。例年通り、非常勤講師とは授業資料等について共有するとともに、担当回終了後には学生の反応と今後の対応についてともに検討した。また、毎回の授業終了時に学生からの質問を確認して、最終レポートにおける学び等を確認し、次年度以降の授業改善に活かした。
看護倫理	小原 泉	全15回の授業は、講義と演習の関連を再確認し、演習の教材を決定した。学生の反応に合わせて演習でのディスカッションテーマを柔軟に調整し、非常勤講師とも随時情報を交換して、学修課題の達成に努めた。各回の授業の際に学生の意見・感想を聞き、講義の理解度、演習課題の難易度や取り組み状況、有用性や満足度を確認して授業改善に努めた。最終回に、まとめのプレゼンテーションおよびディスカッションを設けたところ、ディスカッションが深まり、最終レポートでも学修課題の達成度が高まったことが確認できた。
看護継続教育論	本田 芳香	科目担当者間で前年度の科目達成状況および取り組み状況を確認し、事前学習課題内容に反映させるよう努めた。科目担当者および科目責任者は、各授業終了後、学生の理解度や取り組み状況などの意見や感想をきき授業改善に努めた。科目終了後、科目担当者間で課題への取り組む

		状況や達成度についての意見交換をし、次年度の授業改善に向けて検討した。
地域医療論	北田 志郎	未開講
地域調査法	春山 早苗	最終回に学生から授業内容や授業の進め方などについて意見や要望を聴取した。その結果に基づき、次年度の授業改善内容を検討した。

2) 専門科目

領域	科目責任者	授業改善の取り組み
小児看護学	横山 由美	各科目の途中で、授業の進捗や内容について学生に確認しながら進めた。また、学生からは最終授業終了後に感想や意見、学びについての課題を確認し、非常勤講師からは授業の最終日に学生の学びの評価や授業の改善点などを確認して、次年度の授業改善を検討した。
母性看護学	成田 伸 野々山 未希子	未開講
クリティカルケア看護学	中村 美鈴	38 単位高度実践看護教育課程における授業の到達目標に対して学生の達成プロセスを把握しながら、適宜、授業の際に、授業内容や進め方、高度看護実践への応用などについて、意見や要望を確認しながら進めた。さらに科目担当者と到達目標や運用方法について振り返りを行い、学生に適したより良い教授方法を検討し、授業改善に努めた。
精神看護学	半澤 節子 永井 優子	未開講
がん看護学	本田 芳香 小原 泉	各学科目終了後、授業目標や内容の進行状況及び達成状況について、学生からの意見や要望の収集、学生の理解度の客観的な確認を随時行った。学生の学修課題達成状況をふまえて、担当教員や非常勤講師からも意見をきき授業内容や運用方法を検討・調整した。専門看護実習においては実習指導者と連携し、院生の実習目標の達成状況に応じた指導を行った。
地域看護管理学	春山 早苗 塚本 友栄	今年度開講した科目について、学習目標の達成状況および担当教員の意見ならびに学生の意見・感想を踏まえ、次年度の授業改善に向けて検討した。
看護技術開発学	村上 礼子	学生の理解度、進捗状況を確認しながら、具体的理解につながるよう、必要な助言を行った。また、多くの教員からの助言がもらえるようゼミ形式での指導場面を多く設けた。さらに、研究指導に対する意見や要望を聴取し、その都度、授業内容や運営方法、スケジュール調整などの検討・調整を行った。学習目標の達成度について担当教員間で意見交換を行い、次年度の授業改善に向けて検討した。
老年看護管理学	宮林 幸江	学生の理解度を確認し、具象的内容を必要時には付加し授業を進めた。特に老年看護における視座、近未来の問題点について、熟思の姿勢を適宜強調・確認した。全体に学習意欲の維持を引き出すように努め、最後にレポート課題にて学修状況と自らの考えとを確認した。

2. 博士後期課程

1) 専門関連科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
異文化精神医療論	大塚 公一郎	未開講
地域保健医療研究論	北田 志郎	初めて担当する科目であったが、授業内容そのものは学生の主体的な取り組みを促し実りあるものとなった。しかし非常勤講師の突然の退職もあり、他の非常勤講師の先生方にもご負担をおかけしつつ日程調整に多大な労力を要してしまい、課題を残した。

2) 専門科目

科目名	科目責任者	授業改善の取り組み
広域実践看護学特論Ⅰ ヘルスケアシステム研究法	春山 早苗	最終回において学生より授業への意見等を聴取した。これに学生の課題への取り組み状況および学習目標の達成状況を加えて、担当教員間で話し合い、次年度の授業改善に向けて検討した。
広域実践看護学特論Ⅱ クリニカルケア研究法	中村 美鈴	学生の到達目標に対する達成プロセスを把握しながら、適宜授業中および最終回には、授業内容や進め方について、意見や要望を訪ねた。さらに科目担当者と授業終了後に到達目標や運用方法について振り返り、学生の準備状況を踏まえ、より良い教授方法を検討し授業改善に努めた。
広域実践看護学特論Ⅲ メンタルヘルス研究法	半澤 節子	授業の到達目標を達成するため、学生の関心や研究テーマなどを適宜確認し、担当教員間で情報を共有した。適宜授業の中で、授業内容や進め方について、意見や要望を聴取し、次年度の授業改善に努めた。
広域実践看護学特論Ⅳ 看護教育・管理研究法	本田 芳香	未開講
広域実践看護学演習 〈ヘルスケアシステム〉 〈クリニカルケア〉 〈看護教育・看護管理〉	半澤 節子	学生が選択したテーマを担当する教員と学生から、授業開始前に研究テーマなどを共有する時間を確保し、学生の進行状況に沿った助言ができるようにした。また、合同研究セミナーでの発表などから研究の進行状況を把握し、担当教員間で情報交換に努め、次年度の授業改善に役立てた。
広域実践看護学特別研究	春山 早苗	研究科長として、今年度の修了生に研究活動や研究指導の感想・意見を聞き、次年度の研究指導の改善に向けて検討した。主研究指導教員として担当の学生へは、研究の進捗状況に応じて学生と指導時期を話し合い、合同研究セミナーで得た意見も参考に指導している。また、副研究指導教員として担当の学生へも合同研究セミナーで得た意見も参考に主研究指導教員らと指導している。
	永井 優子	個別指導および副指導教員を含めた指導から学生の進捗状況を把握して研究指導に反映させた。論文作成を中心とした勤務の調整状況を確認し、執筆時間の確保について指導を試みたが、職位の変更と勤務先の組織改編等に関する助言が十分にできなかったことを顧みて、次年度の指導方針と計画立案に活かした。
	中村 美鈴	個別指導およびゼミ指導、合同セミナーにおける学生の研究課題の明確化に至るプロセスと状況を丁寧に把握し、副指導教員と共に定期的に研究指導を行ったことを振り返り、より学生が主体的に取り組めるような教授方法を検討した。

	成田 伸	面談での個別指導およびメールのやり取りを通じて、受講生の進捗状況を把握し、副研究指導教員からの意見も得て、研究指導に反映させている。
	半澤 節子	個別指導および合同研究セミナーにおいて、学生の進捗状況を把握し、研究指導に反映した。ワークライフバランスなどについても適宜把握しながら、学生が主体的に取り組めるように教授方法を工夫した。
	横山 由美	個別指導および合同研究セミナーから学生の考えを把握し、本年度の課題を学生と話し合い、次年度に向けて検討した。

II. 看護学研究科担当教員間の評価

平成 29 年度は実施しなかった。

III. 研究科長と大学院生との懇談会

年 2 回、講義・演習、研究指導、及び学習環境について大学院生に意見を聞き、必要な対応を行った。

1. 第 1 回懇談会

- 1) 実施日時：平成 29 年 9 月 19 日（火）17:00～18:00
- 2) 実施場所：会議室
- 3) 参加者：前期課程学生 1 年 3 名（2 名欠席）、2 年 8 名（1 名休学）
後期課程院生 1 年 2 名、2 年 0 名（2 名欠席）、3 年 0 名（6 名欠席） 計 13 名
- 4) 学生からの学習や学生生活についての感想

<前期課程>

自分の課題が認識できた、モチベーションを維持するのが少し大変だった、主体的な学習が難しい、同期で支えあいながら取り組んでいる、合同研究セミナーへの参加は参考になる、学習と家庭生活との両立が大変、仕事と勉強の切り替え方がうまくなった、上司や他職種への伝え方や資料化等に役立った、研究のプロセスは管理的仕事にも役立つなどの感想が挙げられた。

<後期課程>

博士前期課程の時よりも深い学習をしている、仕事と学習の両立が大変などの感想が挙げられた。

- 5) 学生からの意見・要望
 - (1) 学習環境について
プリンター、文房具など学習環境は良い、看護学務課の職員が相談に乗ってくれてたすけられているなどが挙げられた。
 - (2) その他
カーペットの清掃後のおいさがすごい、データの整理・分析作業のために研究室の机がもう少し広いとよいなどが挙げられた。

2. 第 2 回懇談会

- 1) 実施日時：平成 30 年 2 月 28 日（水）17:00～18:00
- 2) 実施場所：会議室
- 3) 参加者：前期課程学生 4 名（3 名欠席）、後期課程学生 1 名 計 5 名
- 4) 学生からの学習や学生生活についての感想
学位論文発表会まで辿り着くことができ良かった、大変だった、指導教授および副査の先生に大変よく指導頂き感謝している、学習や研究活動に必要な図書や物品も学生の希望が反映され充実していてよかったなどの感想が挙げられていた。
- 5) 学生からの意見・要望
学習や研究活動に必要な図書や物品が充実していた領域とそうでない領域があり差が生じないとよい、論文審査後の進め方について戸惑ったなどが挙げられていた。

IV. 大学院看護学研究科FD研究会の実施

1. 目的

大学院教員の研究指導力を高める一環として、グループインタビュー法を理解し、研究手法として活かすことができる。

2. 目標

- 1) グループインタビュー法の実施について知る
- 2) グループインタビュー法の分析方法および活用について知る
- 3) グループインタビュー法による論文化のコツを知る

3. 日時・場所

2018年3月12日(月) 13時～16時、学習室

4. 内容

テーマ 「グループインタビュー法を学ぶ」

講師 安梅勅江先生(筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)

東京大学医学部保健学科卒業、東京大学医学系研究科大学院で保健学博士を取得。厚生省国立身体障害者リハビリテーション研究所、米国社会サービス研究所客員研究員、厚生省併任、東京大学医学部講師併任、イリノイ大学客員研究員、浜松医科大学教授、2006年に現職 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授、ヨンシヨビング大学客員教授。

【専門領域】

生涯発達ケア、地域ケア、国際保健福祉マネジメント、エンパワメント科学

1) プログラム

司会 野々山未希子委員

時 間	内 容	
13:00～13:05	看護研究科長ご挨拶	春山早苗研究科長
13:05～15:55	講義・演習 FGI デモ 実施・分析・論文化の方法とコツ *休憩は適時入ります	安梅勅江先生
15:55～16:00	幹事長ご挨拶	成田伸研究科幹事長

<参考テキスト>

- (1) ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法
- (2) ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ 活用事例編
- (3) ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ 論文作成編

<配布資料>

- (1) フォーカス・グループ・インタビュー 活用のコツ
- (2) 住民参加型の保健福祉活動の推進に向けたコミュニティ・エンパワーメントのニーズに関する研究

2) 実施状況

参加者：大学院担当教員 19名、大学院担当以外の教員 11名、大学院生 5名

- (1) グループインタビュー法の特徴についての講義後、参加者のうち6名によるFGIデモンストレーション、その他の参加者は全員、記録者(逐語)と観察者に分かれ、FGIデモンストレーションを観察後、感想や安梅講師と質疑・応答を行った。
- (2) 分析方法について
記録者と観察者で2人一組になり、参加者6名のFGIデモンストレーションで得た、データの分析を行った。その際、参加者全員が同じデータで分析できるよう、記録者の内1名のものを共通で使用した。2組が分析結果と構造図を発表した。
- (3) グループインタビュー法による論文作成について講義
グループインタビュー法による論文作成のコツについて講義後、1文献を用いて、論文の要素について確認を行った。

3) 実施後アンケート結果

参加者 35 名、アンケート回収数 19 (回収率 54.3%)

(1) アンケート回答者の概要

大学院の授業を担当する教員 11 名、担当しない教員 3 名、大学院生 1 名、無回答 3 名

【大学院の授業を担当する教員の担当科目】

共通科目 (CNS) 5 名、共通科目 (CNS 以外) 1 名、実践看護学講義 5 名、実践看護学演習 4 名、実践看護学実習 4 名、地域看護管理学講義 2 名、地域看護管理学演習 3 名、特別演習 3 名、課題研究 5 名、特別研究 6 名、無回答 1 名

(2) グループインタビュー法についての具体的イメージ

具体的イメージがとてできた 4 名 (21.1%)、できた 15 名 (78.9%) であり、あまりできなかったとの回答は無かった。

(3) グループインタビュー法の活用

活用できる 13 名 (68.4%)、活用できない 4 名 (21.1%)、無回答 2 名であり、活用できない理由として「院生のグループとして小集団になるほどの指導場面がほとんどない」「グループインタビュー法の基礎について再度学び直す必要がある」などであった。

(4) プログラムの適切性

プログラムがとても適切である 4 名 (21.1%)、適切である 15 名 (78.9%)、やや適切でない・適切でないの回答は無かった。

(5) 今後実施するとよいと思うテーマ

「研究手法」が 6 名であり、「量的研究」「現象学」などが挙げられていた。また、「倫理も含めた、看護研究に関する法的な規範」が挙げられていた。

V. 意見箱について

投稿された意見はなかった。